

【香川県人権擁護委員連合会長賞】

全ての人が幸せに暮らすために

坂出市立坂出中学校 二年 塚田小晴

今、私は楽しく中学校生活を送っています。気の合う友だちと好きなドラマの話で盛りあがったり、部活動のなかまとコンクール金賞をめざして練習を頑張ったり、周りの友だちと同じように過ごしています。でも、時々、みんなとは違う行動をすることがあります。例えば集会の時、みんなは床に体育座りで座っているのに、私は椅子を用意してもらい、そこに座っています。体育の時間も、ケガや体調不良でもないのに、見学をすることがあります。小学六年生の夏休み、それまでできていた事がいろいろとできなくなりました。それは胸腰椎側弯症と診断され、一日二十三時間側弯矯正器具（コルセット）を付けることになったからです。そして、その日から私の生活は一変したのです。

私の付けているコルセットは、固いプラスチックで、私の体にピッタリ隙間なく作られています。それをひもできつく締めあげるのですが、コルセットは脇下から腰まで覆っているので、その部分は体が固定されて曲がりません。そして、夏は暑くて、コルセットの中は汗でビショビショになります。装具を付けると、背中を丸めて靴下をはくことも、机の下に落ちた消しゴムを拾うことも今までのようにはできなくなりました。想像をはるかに超えて、日常生活でできなくなりましたことや不便なことが多いのに、とても衝撃を受けたのを、今でもはっきりと覚えています。そして、中学校に入学し、部活動を決める時にも、やはり装具を付けていることで制限がありました。元々、小学校時代ずっとバスケットボールをしていたので、バスケットボール部に入りたいという気持ちもあったのですが、やはり装具を付けると呼

吸にも制限があるので、その状態で、ハードなバスケットボール部の練習についていくことは困難だなと考え、以前から興味のあった吹奏楽部に入りました。

私の付けている装具は、体に合わせて作られているので、冬等は上から厚い服を着ていると、見た目ではほぼみんなと同じです。ですが、夏になると服の上からでも固い装具の形が分かります。堂々と、「それ何？」と聞かれたこともあります。私に直接ではなく、友だちに聞いてくる人もいました。その時、私は自分が友だちから変な目で見られているのではないかと思い、少し悲しくなりました。

でも、実際生活していくうえで、私は周りの人にとっても助けられ、病気のことを理解してもらえらることでみんなに支えられています。小学校の時は、ランドセルを背負うと呼吸がしづらいため、学校から肩かけバッグの使用を許可して頂いたり、下の方の下駄箱にはかがんで靴を入れづらいたろうからと、上の方の靴箱に変えてもらったり、先生方が、どうしたら私が生活しやすくなるかを一生懸命考えてくださいました。また、私ができないことやしづらいことは友だちが代わりにしてくれたり、手伝ったりしてくれました。

私はこの器具をつけて気づいたことがたくさんありました。車いすに乗っている人、白杖をついている人、義手、義足の人など、見て体に不自由なところがあると分かる人だけが助けを必要としているとは限りません。障がいがあるけれど見た目だけでは分からない人や、私のように障がいではなく、見た目では分からないけれど助けを必要としている人もいます。もしかしたら、毎朝あいさつを交わす人も体に不自由なところがあるかもしれないし、いつも話している隣の人も障がいがあるかもしれません。見た目には分からなくても、助けを必要としている人がたくさんいるのです。体が不自由な人たちは、その人たちにしか分からない、できない、しづらいことがあります。私もそ

うでしたが、周りの協力によって本当に助けられます。障がいのある人にとって、その人への理解と周りの協力は不可欠です。

私も装具を付けることになった時、それをクラスの友だちに話すかどうかとても迷いました。でも、みんなが私の器具のことを知って、理解してくれたおかげで、私は、それまでに近い生活を送れたのだと思います。

障がいのあることは不便だけれど不幸ではない、という言葉がとても印象に残っています。私たち一人ひとりが、もっと周囲への思いやりの心と、自分とは異なる特性のある人への理解を深めれば、今、生活していく上で不便を感じている人や、生きづらさを感じている人も、もっと幸せを感じてもらえる世の中になるのではないかと思います。